

2009年度 教職員評価（SWOT）

（１）評価の方法

初年度の取り組み結果についてリフレクションと評価するにあたり、実施した取り組みの内容をSWOT分析の手法を用いて振り返りを行った。まず、SWOT分析用紙にサービスラーニングクラスおよびサービスラーニングセンターの担当教職員が個々のリフレクションの内容を記入した。次に別々に記入された内容を統合した上で、整理して一つにまとめた。最後に統合されたリフレクションのまとめをもとにして、総合評価を行った。

（２）SWOT分析によるリフレクションの観点

下記の内部環境にかかわる観点ごとに、「Strengths 強み」と、その強みをさらに活かす方策、または「Weakness 弱み」と、その弱みを解消する方策を分析した。

①学生の学習成果

- ・ 自己形成力の向上の成果
- ・ 学問的な学びの成果
- ・ 貢献できたかどうかの学生の自覚

②教職員による学生の指導

- ・ 自己形成力の向上の成果
- ・ 学生の履修選択
- ・ 前記の授業内容
- ・ 活動中の学生のフォローアップ、助言指導
- ・ 後期の授業内容

③プログラムの運営

- ・ 運営会議
- ・ 研究会
- ・ 教員間の連携
- ・ 教職員間の連携
- ・

下記の外部環境にかかわる観点ごとに、「Opportunities 機会」と、その機会をさらに活かす方策、または「Threats 脅威」と、その脅威を解消する方策を分析した。

④活動先への影響

- ・ 活動先への学生の貢献
- ・ 学生の受入による活動先の変化
- ・ 学生の地域活動による地域の変化

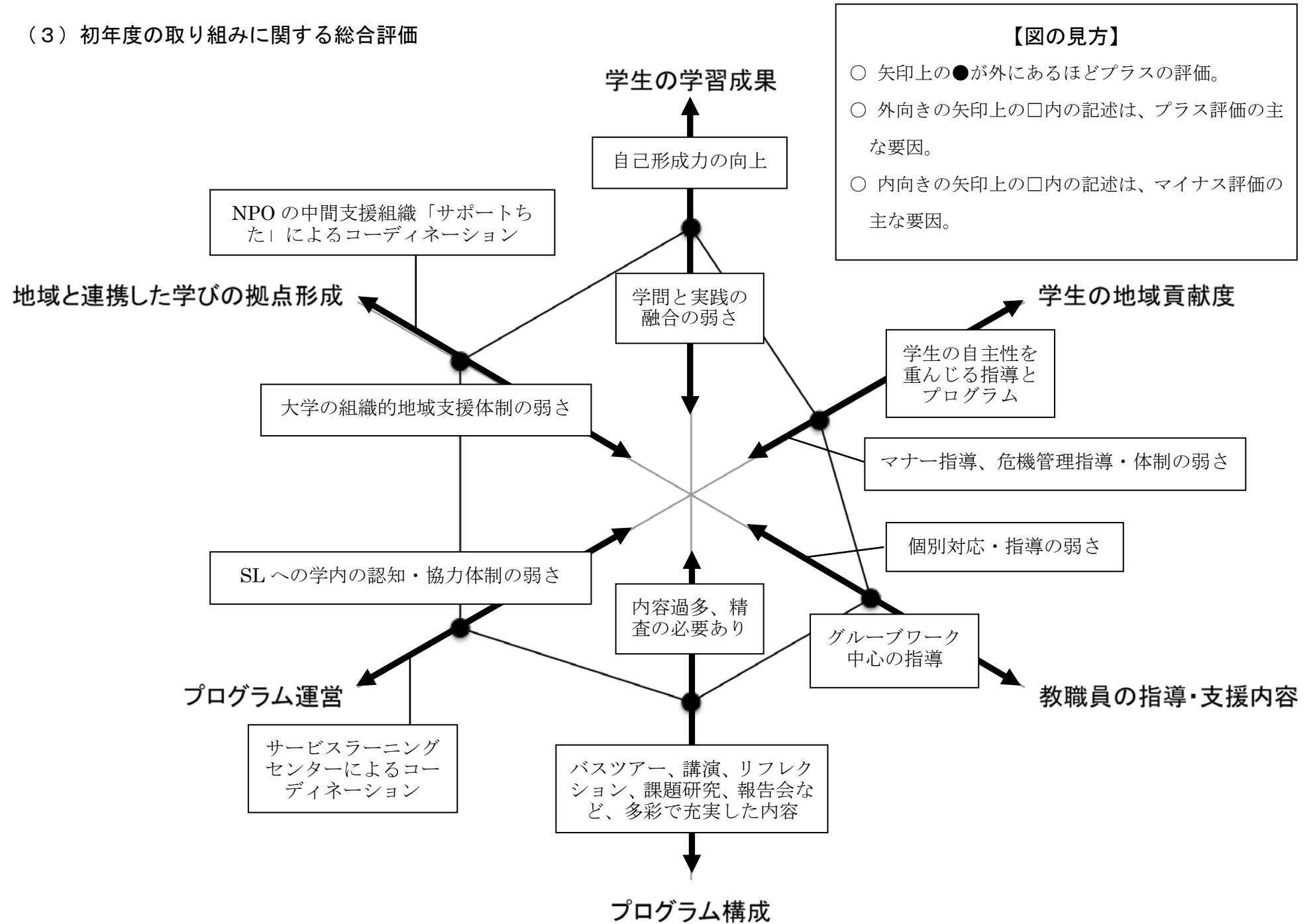
⑤大学への影響

- ・ 学生の地域活動の大学にたいする影響
- ・ 学内の理解の深まり
- ・ 学内の理解を深め広げる取り組み

⑥教職員による学生の指導

- ・ 活動先への依頼、合意、契約
- ・ 前期中の活動先とのコミュニケーション
- ・ 活動中の活動先とのコミュニケーション
- ・ 後期中の活動先とのコミュニケーション
- ・ 次年度のプランニングへの活動先の関与

(3) 初年度の取り組みに関する総合評価



(4) SWOT 分析によるリフレクションの内容

① 学生の学習成果

	活動先への学生の貢献	学生の受入による活動先の変化	学生の地域活動による地域の変化
強み	「学習意欲」「対人関係能力」「問題解決力」の向上。	「福祉教育論」「地域福祉論」「NPO 論」等の学問的な学びへの萌芽的な成果が見られた。	学生の自主企画について貢献できたという自覚が高い。
改善点	<p>意欲や目的意識を高めるグループワークの充実。</p> <p>キャリア形成に結びつけるプログラムの工夫。</p>	<p>課題図書とレポート、課題グループ研究の導入。</p> <p>他大学のベストプラクティスとの交流を通してモデルを示し、学問的な学習のレベルアップを図る。</p>	<p>活動先についての調査、アセスメントの充実。</p> <p>先輩をメンターとして位置づけて後輩を育てる仕組みをつくる。</p>
弱み	内面的な成果が一過性で、長続きしない可能性がある。	報告会の発表内容が事例研究のレベルになっていない、活動をとおした学びが学問的に深められていない。	事前の段階の活動先に関する情報が不足していたため十分に貢献できなかった面がある。

② 教職員による学生の指導

	自己形成力の向上の成果	学生の履修選択	前記の授業内容	活動中の学生のフォローアップ、助言指導	後期の授業
強み	<p>地域社会に目を向けさせることができた。</p>	<p>学外での体験学習に強い意欲を持って履修した学生が多い。</p>	<p>自己表現や意見交換の力を高めることができた。</p> <p>NPOの実態と必要性を伝えることができた。</p>	<p>活動中のトラブルにSLセンターが的確に対応できた。</p>	<p>学習効果を高める仕組みが多彩に用意されていた。</p>
改善点	<p>学生同士のピアエデュケーションの実施。</p> <p>個別面接時間の確保。</p>	<p>今年度履修した学生をアシスタントとして組織化するためのリーダー養成プログラムの開発。</p> <p>履修に関する相談に時間をかける。</p>	<p>活動先ごとのグループワークのみでなく、クラス全体のつながりをつくる授業の工夫。</p> <p>1年次のうちに活動先の選択、決定を終える(改善済み)。</p>	<p>夏休み中に運営会議を行う。</p> <p>活動中にも、マナー指導、社会貢献活動の意義の再確認などができる仕組みをつくる。</p>	<p>各作業の見通しを学生に示す。</p> <p>プログラムの精査。</p>
弱み	<p>個別のアドバイスが必要な学生への指導の不足。</p>	<p>サービスマーケティングについての具体的なイメージがないままに履修した学生が多い。</p>	<p>活動先選択が5月のバスツアー後だったため、その後の活動に向けた準備の授業時間が限られた。</p>	<p>支援を必要とする学生にたいする個別指導が十分できなかった。</p>	<p>課題が過多で、スケジュールが過密だった。</p>

③ プログラムの運営

	運営会議	研究会	教員間の連携	教職員間の連携
強み	<p>教職員間の共通理解の形成など効率的、効果的に実施できた。</p> <p>SL 研究者、知多地域の NPO 中間支援組織の代表者が加わっていた。</p>	<p>サービ斯拉ーニングのリフレクションと評価について研究を深めることができた。</p>	<p>運営会議で授業の様子を確認し合い、各クラスが足並みをそろえることができた。</p>	<p>教育 GP 申請段階から、教職員が役割分担して、協働していた。</p> <p>SL センタースタッフによる教員のサポートが適切に行われていた。</p>
改善点	<p>取り組みの手順のマニュアル化や書類の体系化。</p> <p>初年度の実績を踏まえ、会議内容を精査する。</p>	<p>研究会チームで FD ワークショップを開催する。</p> <p>学会報告などのゴールを設定して、共同研究成果をまとめ発表する。</p>	<p>各クラスのワークシートや授業内容を公開する。</p>	<p>運営会議などで教職員の隔てなく自由で活発な意見交換を心がける。</p> <p>授業や学生の活動状況について報告する定型のフォームをつくる。</p>
弱み	<p>話し合う事項が多すぎて、時間に追われがちである。</p>	<p>研究会の成果を実質的な研究として深めることができなかった。</p>	<p>学生の NPO での活動内容について報告し合う場がなかった。</p>	<p>クラス担当教員による報告、連絡、相談のルールがない。</p> <p>学事課職員、SL センター職員の献身的な職務遂行にやや頼っている状況がある。</p>

④ 活動先への影響

	活動先への学生の貢献	学生の受入による活動先の変化	学生の地域活動による地域の変化
機会	<p>学生たちが NPO に入りイベントなどを企画することにより、家族や地域が分断された実態に、新しい人のつながり、広がりをもたらした。</p>	<p>学生という中間的な存在の受入が、活動先のスタッフと利用者がそれぞれを新たな視点で振り返るきっかけをつくった。</p> <p>実習とは違う、NPO を場とした新たな学びの文化を生み出した。</p>	<p>利用者の家族や地域の人々が、学生の活動に触れて、子どもの体験、異世代交流の必要性、NPO の価値について気づいた。</p>
改善点	<p>学生の自主企画に関する満足度の高さを NPO に伝え、自主企画の重要性についての理解を深める。</p> <p>NPO によるルール、マナーの講座、リスクマネジメント・マニュアルの作成。</p>	<p>学びの拠点としての NPO ネットワークを形成するために、NPO の中間支援組織にたいする大学の組織的支援と関与を促進する。</p> <p>大学と NPO が共同して SL スーパーバイザー養成に着手する。</p>	<p>学生と利用者の家族や地域の人々がふれあう機会の意義を NPO に伝える。</p> <p>SL センターと大学ボランティアセンターの連携の強化。</p>
脅威	<p>礼儀、マナーの問題で貢献できない場面が多く見られた。</p> <p>学生の重大な過失・自己、教育 GP 後のプログラムの継続性など、SL に関する地域の信頼を失墜するリスクがある。</p>	<p>試行錯誤を通した学生の成長を確認できる場面に立ち会えなかった NPO のスタッフも多い。</p> <p>SL 推進にあたってのスーパーバイザーが不足していた。</p>	<p>SL 後の学生の地域活動参加を継続させ、弱体化させない仕組みが整っていない。</p>

⑤ 大学への影響

	学生の地域活動の大学にたいする影響	学内の理解の深まり	学内の理解を深め広げる取り組み
機会	<p>各 NPO が、学生たちの活動をニュース等で取りあげて紹介してくれた。</p>	<p>初年次教育などにおける、学生の自学・自習支援方策の必要性について学内の認識が高まっている。</p>	<p>FD、教員向け講演会、海外ゲストと学長の懇談、公開の報告会などを通して、SL の意義や内容について学内の理解を広げた。</p>
改善点	<p>地元のマスコミ等の活用やNPO から学内への情報発信などにより、学内の SL への認知を高める。</p>	<p>カリキュラム研究開発を進めて、SL センターのビジョンと初年次教育戦略の接合を図る。</p>	<p>SL プログラムの成果を学外にも発信して学外の評価を高めることにより、学内の認知も高める。</p>
	<p>地域に支えられたアクティブ・ラーニング・モデルという大学教育のミッション・特色の明確化と教育方針の策定。</p>	<p>SL 教育研究成果の学術的発信、SL における専門教育と関連した学習目標の明確化。</p>	
脅威	<p>学生の地域活動をとおした学習プログラムを、単に教育指導における「負担増」としてしかみなさない学内認識がある。</p>	<p>SL プログラムを教養教育としてとらえる傾向があり、学部教育としての位置づけが弱い。</p>	

⑥ 活動先とのパートナーシップ

活動先への依頼、合意、契約	前期中の活動先とのコミュニケーション	活動中の活動先とのコミュニケーション	後期中の活動先とのコミュニケーション	次年度のプランニングへの活動先の関与
<p>機会</p> <p>知多エリアでNPOの幅広いネットワークをもつサポートちたが調整役として位置づけられている。</p>	<p>SLセンターによる連絡・調整が緊密に行われた。</p>	<p>活動前に「活動中のお願いハンドブック」を作成した。</p>	<p>学生の活動日誌・まとめへのコメント、懇談会、報告会などでコミュニケーションをすることができた。</p>	<p>サポートちたが活動先の事情や意見を吸い上げて、次年度のプランニングに活かした。</p>
<p>改善点</p> <p>サポートちたの調整担当者にも運営会議に参加してもらおう。</p> <p>活動先向けにSLをわかりやすく解説した資料を作成。</p>	<p>SLセンター、サポートちた、活動先の担当者による連携を深めるための話し合い。</p>	<p>一時的・形式的コミュニケーションにとどまらないクラス担当教員による活動先訪問方法の工夫。</p>	<p>クラス担当教員による活動終了後の活動先訪問。</p> <p>後期授業を活動先事業所で開催する工夫。</p>	<p>必要に応じて運営会議に活動先にも参加してもらおう。</p> <p>研究会を活動先事業所で開催する。</p>
<p>脅威</p> <p>SLについての理解にNPOの間で差がある。</p>	<p>学生の個別情報を活動先とどこまで共有するかについて検討が必要。</p>	<p>クラス担当教員による活動先訪問、現場での生の声の収集が不足していた。</p>	<p>コミュニケーション促進に伴う活動先の負担感の増大がある。</p>	

